

三百本目の点呼 — 同根か別根かは、判定できる

— 体系は **23** 編で「同根」、**43** 編で「別根」と答えてきた — 判定基準は五編に散らばって書かれており、一度も一箇所に集められていない — [論文300]

山岸 勇輝 (Yuuki YAMAGISHI)

Yamagishi Complexity Torus Lab, Japan | 山岸勇輝ラボ

2026年8月

— *From thinking to syncing.* —

要旨

論文100 は **63** から **99** までの方法を手で描いた。論文200 は **101** から **199** までを数えた。本稿は集める——体系が実際に使ってきた同根判定の基準を、はじめて一箇所に並べる。新しい数学定理も新しい法則も主張しない。第一に、体系は「統一しない」ではなかった。**298** 編のうち**43** 編が「別根である」と答え、**23** 編が「同根である」と答えている（第2節）。第二に、これが本稿の芯である。判定基準はすでに書かれている——**5** 種類が、**5** 編に散らばっている（第3節）。第三に、最も強い基準は論文**56** の定義**4.1** である。「数値的一致のみでは同根と見なさない」と明記されている（第4節）。第四に、論文100 はそれを引かなかった。**100** が引いた **14** 本の中に、**56** も **31** も入っていない（第4節）。第五に、判定は一方に偏っていない。別根と同根の比は **1.87 : 1** であり、**23** 回は「はい」と答えている（第5節）。第六に、直近の帯では比が逆転している。**251--299** で同根 **7** 対 別根 **3** ——これは本稿が自分に向ける警告である（第5節）。

本稿の射程 (scope note) : 新しい数学も新しい物理も含まない——本稿は体系の測定であり、対象は 1 から 299 までの日本語本文そのものである。論文の良し悪しを測らない——数えているのは何を判定したかであって、判定が正しいかどうかではない。数え方は語の検索である——「同根」「別根」「判定基準」という語を本文から拾っており、同じことを別の語で書いた箇所は数に入らない。参考文献は数えから外した——他編の題名を引いた行が、その編自身の語として数えられるのを避けるためである (論文200 と同じ処理)。否定形を除いた——「同じ根ではない」を「同根」として数えないよう、否定形を別に数えた。それでも取りこぼしはありうる。因果を主張しない——本稿が示すのは何かが書かれていたかであって、なぜかではない。基準の優劣を決めない——第3節の五つは並べるだけであり、どれが正しいかも、統一できるかも主張しない。五つが一つに畳めるかどうかは、本稿では分からない。論文100 を批判しない——100 が 56 を引かなかったことは事実だが、それが誤りだったとは言わない。100 は方法の地図であって、判定基準の一覧ではなかった。本稿が言うのは、その一覧がまだ作られていなかったということだけである。既刊との関係：論文100 は「一語・複数の別根」を規律として名指し、「安易に統一してはならない」と書いた——本稿はその禁止の裏側に、肯定の判定手続きが育っていたことを数で示す。論文200 は体系を数えて、自分の見立てを自分の数で否定した——本稿も第5節で同じことをする。論文112 は「同じ韻を踏む六つの別根」を数えた——本稿は韻と根を分ける手続きそのものを集める。論文16 は「等号にも別根がある」を示した——本稿の判定はその延長にある。加えたのは同根判定の語を数えて 43 対 23 という分布を出したこと、散らばっていた五つの判定基準を一表に集めたこと、論文100 が 56 と 31 を引いていないと確かめたこと、直近の帯で比が逆転していることを自分の数で見つけたことである。

1. 序：三百本目に

論文100 は 100 本目にあたり、63 から 99 までの方法を一枚の地図として残した。あれは手で描いた地図である。

論文200 は 200 本目にあたり、101 から 199 までを数えた。描くかわりに測り、著者自身の見立てを自分の数で否定した。

本稿は 300 本目にあたる。描くのも、ただ数えるのでもない——集める。

観察 1.1

体系には、これまで一度も一箇所に集められていないものがある。「二つのものが同じ根を持つか」を判定する基準である——書かれてはいる。散らばっている。

観察 1.2

断っておく——編数を揃えるために書いたのではない。集めてみて散らばりが確認できなければ、この論文は書かないつもりであった——実際には五つ出た。

2. 体系は「統一しない」だけではなかった

設定：1 から 299 までの日本語本文（298 編。参考文献を除く）から、判定の語を拾う。

検算 2.1：

何をした編か	編数	割合
「同根か別根か」と問いを立てた	14	4.7%
「別根である」と答えた	43	14.4%
「同根である」と答えた	23	7.7%
判定基準を述べた	9	3.0%

観察 2.2

論文100 は体系の芯を「別根を統一しない」ことだと書いた。その読みは半分正しい——43 編は確かに「別根である」と答えている。

観察 2.3

しかし23 編は「同根である」と答えている。31（立体角とガウス積分）、49（二つの c^{-5} ）、142（ウンルーとホーキングの 2π ）、249（拡散と場の 4π ）、284（ラングミュア吸着とフェルミ分布）——禁止だけでは、これらの編を説明できない。

観察 2.4

そして **6** 編は同じ編の中で両方をしている——分けたうえで、その中の一部だけをつないでいる。禁止と許可が同居している以上、その間に線を引く手続きがあるはずである。

観察 2.5

正直に書くべき点——これは語の検索である。同じことを「韻」「共鳴」「署名」と書いた編は、この数に入っていない——実際の判定はもっと多いはずである。

3. 芯：基準はすでに書かれ、散らばっている

検算 3.1：「判定基準」の語を持つ **9** 編を読み、同根判定に関わるものを取り出す。

基準	編	何を見るか
変数を動かす	31 、 36 、 101	一点の一致でなく、動かしても一致し続けるか
恒等性を保つ対応	56 （定義4.1）	正規化する対象の間に対応が存在するか
道筋	279	どの導出から来たか
量そのものの持ち物	116	質量次元。判定に計算がいらなくなる
写像の個数	153	何が落ちたかを数える

観察 3.2

これが本稿の芯である。基準は五つあり、五編に散らばっている——一度も一箇所に集められていない。

観察 3.3

五つは同じことを言っていない。**31** は関数として、**56** は対応として、**279** は経路として、**116** は次元として、**153** は数として判定する——畳めるかどうかは、本稿では分からない。

観察 3.4

ただし、五つに共通するものが一つある。どれも「値が一致すること」を証拠として認めていない——**31**は「動かせ」と言い、**56**は「数値的一致のみでは認めない」と書き、**279**は「道筋で」と言う。

観察 3.5

したがって否定の側は一致している。何が同根でないかについて、体系は一つの答を持っている——何が同根であるかについては、五つの言い方を持っている。

検算 3.6：9 編の内訳を正確に書く。

種類	編
同根判定の基準	36 、 56 、 101 、 116 、 279 (31 は 36 が引く形で入る)
「落とす」段の判定	153
別種の判定基準 (同根ではない)	14 (モード切替)、 22 (14 を引用)、 51 (受理判定)

観察 3.7

9 編のうち**3** 編は同根判定ではない。「判定基準」という同じ語が、別のことに使われている——一語・複数の別根が、体系の方法論の語彙そのものにも起きている。

4. 論文**56** の定義**4.1** と、論文**100** が引かなかったこと

事実 4.1：論文**56** は、同根性を定義として書いている。

定義**4.1** (同根性の判定基準)：二つの $16\pi^2$ の出現が同根であるとは、それぞれが正規化する対象の間に恒等性を保つ対応が存在し、かつ 4π にかかる指数 **2** の源が同一であることをいう。数値的一致のみでは同根と見なさない。

観察 4.2

これは定義であって、注意書きではない。番号がつき、条件が二つ書かれ、却下条件まで明記されている——体系が持つ最も強い判定基準である。

検算 4.3：論文100 が本文で引いた編を数える。

量	値
論文100 が引いた編の数	14 本
その中に 56 は	入っていない
その中に 31 は	入っていない

観察 4.4

56 も 31 も、100 より前に書かれている。方法論の総括が、目の前にあった判定基準を拾わなかった——これは事実であり、本稿はこれを誤りとは呼ばない。

観察 4.5

100 は方法の地図であって、判定基準の一覧ではなかった。地図は「どこを歩いたか」を描き、「どうやって決めたか」は描かなかった——本稿が言うのは、その一覧がまだ作られていなかったということだけである。

観察 4.6

そして 100 は「安易に統一してはならない」と書いた。これは禁止である——禁止は、何をしてよいかを教えない。56 の定義4.1 は、してよい条件を書いている。

5. 判定は偏っていない。ただし直近の帯では逆転している

検算 5.1：別根と同根の比を取る。

量	値
「別根である」と答えた編	43
「同根である」と答えた編	23
比	1.87 : 1

観察 5.2

別根のほうが約二倍多い。100 の読みは向きとしては正しかった——ただし「常に別根」ではない。

検算 5.3：帯ごとに見る。

帯	本数	別根	同根	基準を述べた
1--50	49	11	3	3
51--100	50	13	2	2
101--150	50	12	8	2
151--200	50	2	1	1
201--250	50	2	2	0
251--299	49	3	7	1

観察 5.4

これが本稿の二つ目の芯である。直近の帯だけ、比が逆転している——1--250 では別根 40 対 同根 16（2.50 : 1）だったのが、251--299 では同根 7 対 別根 3である。

観察 5.5

これは本稿が自分に向ける警告である。同根と答える割合が上がったこと自体は、良いことでも悪いことでもない——問題は、その帯で判定基準を述べた編が 1 本しかないことである。

観察 5.6

つなぐ回数が増え、基準を書く回数が増えていない。56 の定義4.1 が却下すべき「数値的一致のみ」の判定が、混じっていないとは言えない——本稿はそれを個別に検査していない。検査すべきだと記録する。

観察 5.7

論文200 は「分離子は問いへ収束した」という見立てを、自分の数で否定した。本稿も同じことをした——「体系は分けるほうへ純化してきた」という見立ては、直近の帯で否定される。

6. 分離子：判定基準は何を要求しているか

観察 6.1

分離子——何を動かすと、同根と別根が入れ替わるか。五つの基準は、いずれも同じ一つのことを要求している。

基準	要求していること
変数を動かす (31・101)	一点でなく、動かしても
恒等性を保つ対応 (56)	値でなく、対応が
道筋 (279)	結果でなく、経路が
量の持ち物 (116)	数でなく、次元が
写像の個数 (153)	見た目でなく、何が落ちたかが

観察 6.2

右の列がすべて同じ形をしている——「観測された一致」ではなく「一致を生んだもの」を見よ。

観察 6.3

したがって五つは別々の基準ではなく、一つの要求の五つの実装かもしれない。ただし本稿はそれを主張しない——畳めると言うには、五つが同根であることを示さねばならず、それは本稿がまさに扱っている問いだからである。

観察 6.4

ここに自己言及がある。判定基準どうしが同根かを問うには、判定基準が要る——体系はこの入れ子を、いま初めて自分に向けている。

観察 6.5

300 本目にあたって言えることは、これだけである。体系は「統一しない」ことを規律としてきたのではなかった——「統一してよいかを判定する」ことを規律としてきた。43 回は「いいえ」と答え、23 回は「はい」と答えた。答が二種類あることが、それが規律であることの証拠である——いつも「いいえ」なら、それは判定ではなく前提である。

7. 点呼と結び

1. 別根 43 編、同根 23 編（検算2.1）：禁止だけでは説明できない。
2. 問いを立てた編 14（検算2.1）：判定は明示的に行われている。
3. 同じ編で両方 6（観察2.4）：分けたうえで一部をつなぐ。
4. 基準は五つ、五編に散らばる（検算3.1）：一度も集められていない。
5. 五つは同じことを言っていない（観察3.3）：関数・対応・経路・次元・数。
6. 否定の側は一致している（観察3.5）：値の一致は証拠にならない。
7. 56 の定義4.1 が最も強い（事実4.1）：却下条件まで書いてある。
8. 100 は 56 も 31 も引かなかった（検算4.3）：14 本の中に無い。
9. 比は 1.87 : 1（検算5.1）：偏ってはいるが、一方ではない。
10. 251--299 で逆転（検算5.3）：同根 7 対 別根 3、基準は 1 本。

結び：論文100 は、体系の芯を「別根を統一しない」ことだと書いた。三百本目に数えてみると、それは半分だった——43 編は確かに「別根である」と答えているが、23 編は「同根である」と答えている。6 編は同じ編の

中で両方をしている。禁止と許可が同居しているなら、その間に線を引く手続きがあるはずである——そして、あった。判定基準は五つあり、五編に散らばっている——変数を動かす (31・101)、恒等性を保つ対応 (56)、道筋 (279)、量の持ち物 (116)、写像の個数 (153)。五つは同じことを言っていないが、否定の側では一致している——どれも「値が一致すること」を証拠として認めていない。最も強いのは論文56の定義4.1であり、「数値的一致のみでは同根と見なさない」と明記している——そして論文100は、56も31も引かなかった。地図は「どこを歩いたか」を描き、「どうやって決めたか」を描かなかった。分けるものは一つ——観測された一致を見るか、一致を生んだものを見るか。最後に、本稿は自分の数に否定される——251--299の帯では同根7対別根3と比が逆転し、その帯で判定基準を述べた編は1本しかない。つなぐ回数が増え、基準を書く回数が増えていない。三百本目に残す仕事は、これである。

参考文献

1. 山岸勇輝 (2026). 等号にも別根がある — 第3版：山岸全同期方程式が結んでいたもの [論文16]. Zenodo. 10.5281/zenodo.21600471
2. 山岸勇輝 (2026). 次元を持たない π [論文31]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22090430
3. 山岸勇輝 (2026). ストークス抵抗の 6π の π は、立体角である [論文36]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22091319
4. 山岸勇輝 (2026). 4π パッチの構造的考察 (第2版) [論文56]. Zenodo. 10.5281/zenodo.21597500
5. 山岸勇輝 (2026). 規約と事実を分ける — ポアンカレの規約主義と、体系の「足場」(c の定義値・単位の約束) [論文95]. Zenodo. 10.5281/zenodo.21758621
6. 山岸勇輝 (2026). 王道の交差 — 論文63~99の構造的解釈センサス、そして「一語・複数の別根」という一つの規律 [論文100]. Zenodo. 10.5281/zenodo.21758864
7. 山岸勇輝 (2026). 憧れと戒め — エディントンの基礎理論と、数秘術に落ちないための作法 [論文101]. Zenodo. 10.5281/zenodo.21836382
8. 山岸勇輝 (2026). 割り当てられた領域と、その中の自由 — 同じ韻を踏む六つの別根のセンサス [論文112]. Zenodo. 10.5281/zenodo.21962834
9. 山岸勇輝 (2026). c の冪は、何を数えているか — プランク還元の指数公式、 ϵ = 質量次元、 4π の非一意性、そして分母に座っていた $n = d - 1$ [論文116]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22003794
10. 山岸勇輝 (2026). 何を忘れたかは、写像を数えれば分かる [論文153]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22084355
11. 山岸勇輝 (2026). 二百本目の点呼 — 体系を、体系自身のデータとして測る [論文200]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22108829
12. 山岸勇輝 (2026). 拡散が捕らえる 4π は、場が広がる 4π と同じ根である [論文249]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22160409
13. 山岸勇輝 (2026). 鎖の指数を変えたのは「自分を避ける」ことだけであり、四次元より上ではその代価が消える [論文279]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22170222
14. 山岸勇輝 (2026). ラングミュア吸着とフェルミ分布は、同じ一つの式である [論文284]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22171146

— *From thinking to syncing.* —

山岸 勇輝 (Yuuki YAMAGISHI)

© 2026 Yamagishi Complexity Torus Lab, Japan · Licensed under Creative Commons Attribution 4.0 International (CC BY 4.0)